

100回記念大賞「夢水の試み」

彫塑 諸井謙司さん(29)佐賀市

「理想と現実の交錯点」具現化

「夢なんて荒唐無稽なものだけど、この姿は印象的に覚えていて」。大賞を射止めた2位超の大作「夢水の試み」は題名通り夢から着想を得て制作した。体に水をまとった男性が、どこかを指さしている。夢うつつの幻想的な世界観は、自身が目指す「理想と現実の交錯点」というテーマをまさに具現化したものになっている。

男性を包む水のデザインには腐心した。当初は立体的でリアルな造形を考えたものの、琳派の波模様などを参考にしながら、浮き彫りで作品に落とし込んだ。実験的な表現だったが「地元の公募展だからこそ遠慮無く作ってみよう」と踏み切ったという。

水で大部分を覆いながら、見せたい部位へと鑑賞側の視線を誘導する。「あくまで案内板のような静止のイメージ」という男性像の動きは最小限にとどめられ、指と視線の動きに集約される。こちらを見ながらかなたを指さす姿が、見る人の想像力をかき立てる。

2015年の県展大賞、今年2月の佐賀銀行文化財団新人賞を受賞した気鋭作家の勢いで、100回記念大賞をつかみ取った。歴史ある展覧会の節目での最高賞に、「光栄でありがたい。選んでいただき感謝の念に堪えない」と喜びを口にした。

(西麻希)

美協賞

受賞作・受賞者紹介

大正時代から1世紀以上の歴史を誇る佐賀美術協会展が、100回目の節目を迎えた。県立美術館・博物館で開かれている100回展には、日本画、洋画、彫塑、工芸の4部門で一般公募の入賞・入選作141点を展示している。今回特別に設けられた100回記念大賞をはじめ、各部門最高賞の佐賀美術協会賞は大学生から60代までが受賞し、幅広い年代が独自の創造性を見せている。100回大賞と美協賞の4作品を紹介する。

(18面に審査評、入賞・入選者名簿は25日付24面に掲載した)

100回記念大賞には、彫塑部門から佐賀市の諸井謙司さん(29)の「夢水の試み」が輝いた。台座まで入れると2位を超える大作で、水をモチーフにした衣装をまとった男性が静かに立つ。圧倒的な存在感が目を引き、一言では説明できない世界観に想像が膨らむ。全審査員による選考で高い支持を集め、文句なしの最高賞となった。

工芸部門の最高賞は、佐賀大4年・藤田香奈子さん(22)＝佐賀市＝の「思案」。円形の器に4つの羽根の形状が動きを与えている。エッジの鋭さとともに、すべて曲線で構成された柔らかなさもあり、多様な印象をもたらす。木目とマッチした漆の仕上げが繊細で丁寧だ。

洋画部門は、佐賀市の古川秀明さん(37)の「纏う」が最高賞に選ばれた。女性に絡みつく白と黒の何か。気体のようにも液体のようにも見えるが、纏ってい

るのだろうか、纏われているのだろうか。幻想的だが引き締まった画面に迫力を込める。入落がハイレベルだった今回、一つずつぬけた表現だった。

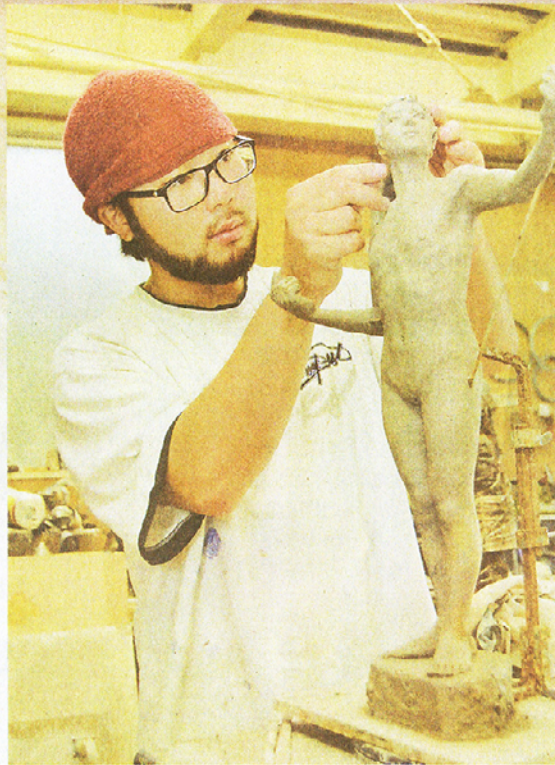
日本画部門で最高賞に選ばれたのは、武雄市の石崎吉枝さん(68)。「白牡丹羽音に崩る・見つめおり」は、白いボタンが咲き散る様を裸婦が見つめている。アゲハチョウが舞う、抑えた色調のファンタジーには優しさも感じられる。

前回までは前後期に分かれていたが、100回展は通期で入賞・入選作と、県内外の第一線で活躍する名誉会員・顧問・会員・会友の作品194点を展示する。

(原田隆博)

▶佐賀市の県立美術館・博物館で、6月11日まで。月曜休館。元衆議院議員の保利耕輔さんが4日午後3時から、県立美術館ホールで「国立美術館設立の経緯について」の演題で記念講演を行う。

世紀を超え創造性育む



「理想と現実の交錯点」で作品を作りたいと話す諸井謙司さん＝佐賀市のアトリエ

